『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（六）

角田泰隆

凡例

一、本稿は、二〇二〇年度における、駒澤大学大学院の角田ゼミ（宗学特講Ⅱ【演習】）で作成した資料を基に作成したものである。

二、【本文】は、本山版『正法眼蔵』（寛政十一年〈一七九九〉刊）を底本とし、左記の『正法眼蔵』諸本と校異して作成した。校異は本文下段に示したが、字体の違い（新字・旧字・異体字等）は、校異から除いた。諸写本によって底本の本文を改めた部分もあるが、その場合は校異に記した。校異した諸本の略号は次の通りである。なお、これらの写本は全て『蒐書大成』に収録されている。

懐奘書写本…懐　正法眼蔵抄…抄　乾坤院所蔵本…乾　正法寺所蔵本…正　龍門寺所蔵本…龍
洞雲寺所蔵本…洞　瑠璃光寺所蔵本…瑠　長円寺所蔵本…長　玉雲寺所蔵本…玉　徳雲寺所蔵本…徳
永平寺所蔵嘉元二年（一三〇四）書写本…嘉

三、【本文】は便宜的に適宜分割し、最初に段落分けを示すため【本文】のみをまとめて掲げ、番号を付した。底本の片仮名は平仮名に改め（子→ね、キ→ゐ、エ→ゑ）、内容解釈に基づいて独自の句読点とルビを付した。【本文】・【懐奘書写本】の漢字は原典の字体をそのまま用いたが、【本文】以外は、【本文】からの引用も含めて、原則として新字体に改めた。

四、【語註】は既刊の辞典等を参照して新たに作成したが、辞典等をそのまま引用したものについては典拠を明記した。【語註】・【解説】で『正法眼蔵』を引用する場合は、大久保道舟編『古本校訂正法眼蔵 全』（筑摩書房、一九七一年四月）

より引用し、頁数のみ記した。但し、既刊の『『正法眼蔵』「仏性」巻訳註」収録箇所は、当該号の略号と頁数で示した。引用文中の傍点・傍線は、全て筆者が付したものである。参照文献・辞典の略号は次の通りである。

『大正新脩大蔵経』…『大正蔵』　『大日本続蔵経』…『卍続蔵』
『景徳伝燈録』（禅文化研究所、一九九〇年五月）…『禅文化本』
中村元編『仏教語大辞典』（東京書籍、一九八一年五月）…『中村仏教』
『新版禅学大辞典』第十刷（大修館書店、二〇二〇年四月）…『禅学』
入矢義高・古賀英彦編『禅語辞典』（思文閣出版、一九九一年七月）…『禅語』
『大漢和辞典』修訂第二版（大修館書店、二〇〇〇年四月）…『大漢和』
『漢辞海』第四版（三省堂、二〇一九年二月）…『漢辞海』
大久保道舟編『道元禅師全集』下巻（筑摩書房、一九七〇年五月）…『大久保本』
水野弥穂子校註　岩波文庫本『正法眼蔵』（一九九〇～一九九三年）…『岩波文庫本』
『道元禅師全集』（春秋社〈原典版〉、一九八八～一九九一年）…『春秋社本』
『道元禅師全集』（春秋社〈原文対照現代語訳版〉、一九九九～二〇〇三年）…『春秋社本〈現代語訳版〉』
河村孝道・角田泰隆編『本山版訂補正法眼蔵』（大本山永平寺、二〇一九年八月）…『本山版訂補』
『永平正法眼蔵蒐書大成』（大修館書店、一九七四～一九八二年、続輯一九八九～二〇〇〇年）…『蒐書大成』
角田泰隆『『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（一）』（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十四号、二〇一六年三月）…「仏性訳註（一）」
角田泰隆『『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（二）』（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十五号、二〇一七年三月）…「仏性訳註（二）」
角田泰隆『『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（三）』（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十六号、二〇一八年三月）…「仏性訳註（三）」
角田泰隆『『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（四）』（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十七号、二〇一九年三月）…「仏性訳註（四）」
角田泰隆『『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（五）』（『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十八号、二〇二〇年三月）…「仏性訳註（五）」

なお「仏性訳註（一）」から「仏性訳註（五）」は、「駒澤大学学術機関リポジトリ」にてインターネット公開されている。

五、【直訳】は、できる限り本文に忠実に訳し、基本的に古文を現代語に訳すにとどめ、一部便宜的に漢字用語の現代語訳も行った。

六、【現代語訳】は、【直訳】に基づいて漢字用語の解説を加え、理解しやすくするために〈　〉内に本文にない言葉を補い、必要に応じて（　）内に直前の語の解釈を付した。

七、【懐奘書写本に見られる書き改めについて】は、懐奘書写本の書き改めの前後でどのように内容が変化したかについて特に解説した。書き改めが少ない場合は、【解説】の中で簡単に言及する形とし、一切無い場合は略した。【懐奘書写本】掲載の理由については、「仏性訳註（一）」七七頁を参照されたい。

【本文】

① 迦那提婆尊者、ちなみに龍樹尊者の身現をさして、衆會につげていはく、此是尊者現佛性相、以示我等、何以知之、蓋以無相三昧、形如滿月、佛性之義、廓然虚明なり。

いま天上・人間、大千法界に流布せる佛法を見聞せる前後の皮袋、たれか道取せる、身現相は佛性なりと。大千界には、ただ提婆尊者のみ道取せるなり。餘者はただ、佛性は眼見・耳聞・心識等にあらずとのみ道取するなり。身現は佛性なりとしらざるゆゑに道取せざるなり。祖師の、をしむにあらざれども、眼耳ふさがれて見聞することあたはざるなり。身識いまだおこらずして、了別することあたはざるなり。無相三昧の形如滿月なるを望見し禮拜するに、目未所覩なり。佛性之義、廓然虚明なり。

② しかあれば、身現の説佛性なる、虚明なり、廓然なり。説佛性の身現なる、以表諸佛體なり。いづれの一佛二佛か、この以表を佛體せざらん。佛體は身現なり、身現なる佛性あり。四大五蘊と道取し會取する佛量祖量も、かへりて身現の造次なり。すでに諸佛體といふ、蘊處界のかくのごとくなるなり。一切の功德、この功德なり。佛功德は、この身現を究盡し嚢括するなり。一切無量無邊の功德の往來は、この身現の一造次なり。

しかあるに、龍樹・提婆師資よりのち、三國の諸方にある前代後代、ままに佛學する人物いまだ龍樹・提婆のごとく道取せず。いくばくの經師・論師等か、佛祖の道を蹉過する。

③ 大宋國むかしよりこの因縁を畫せんとするに、身に畫し、心に畫し、空に畫し、壁に畫することあたはず、いたづらに筆頭に畫するに、法座上に如鏡なる一輪相を圖して、いま龍樹の身現圓月相とせり。すでに數百歳の霜華も開落して、人眼の金屑をなさんとすれども、あやまるといふ人なし。あはれむべし、萬事の蹉跎たることかくのごと

きなる。もし身現圓月相は一輪相なりと會取せば、眞箇の畫餅一枚なり。弄他せん、笑也笑殺人なるべし。かなしむべし、大宋一國の在家・出家、いづれの一箇も龍樹のことばをきかず、しらず、提婆の道を通ぜず、みざること。いはんや身現に親切ならんや。圓月にくらし、滿月を虧闕せり。これ稽古のおろそかなるなり、慕古いたらざるなり。古佛・新佛、さらに眞箇の身現にあふて畫餅を賞翫することなかれ。

④　しるべし、身現圓月相の相を畫せんには、法座上に身現相あるべし。揚眉瞬目、それ端直なるべし。皮肉骨髓正法眼藏、かならず兀坐すべきなり。破顔微笑つたはるべし、作佛作祖するがゆゑに。この畫いまだ月相ならざるには、形如なし、說法せず、聲色なし、用辨なきなり。もし身現をもとめば、圓月相を圖すべし。圓月相を圖せば、圓月相を圖すべし、身現圓月相なるがゆゑに。現圓月相を畫せんとき、滿月相を圖すべし、滿月相を現ずべし。しかあるを、身現を畫せず、圓月を畫せず、滿月相を畫せず、諸佛體を圖せず、以表を體せず、說法を圖せず、いたづらに畫餅一枚を圖す、用作什麼。これを急著眼看せん、たれか直至如今飽不飢ならん。月は圓形なり、圓は身現なり。圓を學するに、一枚錢のごとく學することなかれ、一枚餅に相似することなかれ。身相圓月身なり、形如滿月形なり。一枚錢・一枚餅は、圓に學習すべし。

※各段の資料作成担当者は左記の通りである（所属・課程年次は本稿提出当時のもの）。
①奥野憲昭（修士課程二年）　②小椋樹里杏（同前）　③塩田空奎（同前）　④菅野優子（博士後期課程二年）
なお本稿は、右記の資料作成者に加えて、左記のゼミの参加者によって検討した共同研究である。
秋津秀彰（曹洞宗総合研究センター研究員）、横山龍顕（愛知学院大学専任講師）、藤川直子（大学院研究生）、石川治（博士課程一年）、水田泰成・本山水悠（修士課程二年）、青野花菜子（修士課程一年）、阿部伸一・玉井宏道・吉田裕。また、本稿を作成するに際してのゼミは、オンラインリモート会議システムを利用して実施された。

迦那提婆尊者、ちなみに龍樹尊者の身現をさして、衆會につげていはく、*

*此是尊者現佛性相、以示我等、何以知之、蓋以無相三昧、形如滿月、佛性之義、*廓然虚明なり。

いま天上・人間、大千法界に流布せる佛法を見聞せる前後の皮袋、たれか道取せる、身現相は佛性なりと。大千界には、ただ提婆尊者のみ道取せるなり。*餘者はただ、佛性は眼見・耳聞・心識等にあらずとのみ道取するなり。身現は佛性なりとしらざるゆゑに道取せざるなり。祖師の、*をしむにあらざれども、眼耳ふさがれて見聞することあたはざるなり。身識いまだおこらずして、了別することあたはざるなり。無相三昧の形如*滿月なるを望見し禮拜するに、目未所覩なり。佛性之義、廓然虚明なり。

※懐奘書写本の書き改めナシ。

いはく―いわく（瑠）

此―右下「ハ」アリ（龍）

是―右「レ」アリ（龍）

現仏性～廓然虚明―現佛性相ヲ以テ示レス我等ニ、何ヲ以テ知レンヿ之ヲ、蓋シ以二無相三昧一ヲ、形如二滿月一ノ、佛性ノ之義廓然虚明（龍）

性―ナシ（瑠）

現―右下「ノ」アリ（龍）

餘―右下「ノ」アリ（龍）

なり―也（正）、以下略

ゑ―へ（乾）（正）（龍）

ざ―ナシ（正）

あたはざる―あたわざる（乾）、以下略

お―を（瑠）

如滿月―如二滿月一（龍）

望―右「ハウ」、左「ノソム」アリ（抄）

禮―礼（懐）（抄）（乾）（正）（瑠）

覩―右「ト」アリ（抄）

【語注】

皮袋…臭皮袋のことで、肉体をいう。肉体は皮袋の中に、すべての骨肉臓物一切を蔵しているからいう。したがって人間のこと（『禅学』一〇四四頁）。人間の卑称。「皮袋」の語を、『正法眼蔵』「渓声山色」には「渓声山色の功徳によりて、大地有情同時成道し、見明星悟道する諸仏あるなり。かくのごとくなる皮袋、これ求道の志気甚深なりし先哲なり」（二一八頁）とあるように、単に「人間」の意味で扱う用例と、『正法眼蔵』「仏経」に「しかあるに、大宋国の一二百余年の前後に、あらゆる杜撰の臭皮袋いはく」（四〇八頁）云々、とあるように、「皮袋」の上に「臭」の字を付し、批判的に使用している用例がある。ここでは単に人間の意。**大千法界**…大千の法界。三千大千世界のこと（『禅学』八〇二頁）。また、この三千大千世界は、一仏の教化する範囲であり、これを一仏国土とする（『中村仏教』四八〇頁）。**身識**…触覚の認識、触覚的認識作用の意。触覚する心。身体によって対象を知覚するはたらき（『中村仏教』七七二頁）。ここでは、全身でもって対象を体得する働きを言うか。**了別**…認識。区別して知ること。対象をそれぞれ区別して知ること（『中村仏教』四八〇頁）。ここでは全身心で認識し体得することを言うか。

【直訳】

迦那提婆尊者は、因みに龍樹尊者の身現をさして、衆会に告げて、「此れは、尊者が仏性の相を現じて、以って我等に示したのである。何を以てこれを知ることができるか。要するに無相三昧の形が満月の如くで〈あることに〉よってである。仏性の義は、廓然として虚明である」と言った。

いま天上界・人間界、大千法界に流布している仏法を見聞している前後の皮袋で、誰か言っているであろうか、「身現相は仏性である」と。大千界では、ただ提婆尊者だけが言っているのである。余者はただ、「仏性は眼見・耳聞・心識等ではない」とだけ言うのである。身現は仏性であると知らないために言わないのである。祖師が惜しむのではないけれども、眼耳がふさがれて見聞することができないのである。身識がいまだおこらないので、了別することができないのである。無相三昧の形が満月の如くで〈あること〉を望見し礼拝するに、目未所覩である。仏性の義は、廓然として虚明である。

【現代語訳】

迦那提婆尊者は、時に龍樹尊者の身現を指し示して、集まった人々に告げて、「これは、尊者が仏性の姿を現して、私達に示しているのである。どうしてそのように分かるのかというと、ようするに無相三昧によって、形を満月のように現されているのである。仏性というのは、〈満月輪のように〉はっきりと明らかである」と言った。

いま天上界・人間界、大千法界にゆきわたっている仏法を見聞した古今の人々で、誰か「身現相は仏性である」と言っているであろうか（誰も言っていない）。大千世界では、ただ提婆尊者だけが言っているのである。ほかの者はただ、「仏性は目で見たり耳で聞いたり、心で分別したりするものではない」とだけ言っているのである。身現は仏性であると知らないために、言っていないのである。祖師が惜しんで〈教えないで〉いるのではないけれども、〈集まった人々は〉眼も耳もふさがってしまっていて、見聞きすることができないのである。いまだ全身心でもって体得するまでに到っていないので、認識することができないのである。〈だから、龍樹尊者が坐禅している〉無相三昧の相（すがた）が満月のようにはっきりしているのを望み見て礼拝しても、〈集まった人々の〉目には見えないのである。仏性というのは、〈満月のように〉はっきりと明らかである。

しかあれば、身現の説佛性なる、虚明なり、廓然なり。説佛性の身現なる、以表諸佛體なり。いづれの一佛二佛か、この以表を佛體せざらん。佛體は身現なり、身現なる佛性あり。四大五蘊と道取し會取する佛量祖量も、かへりて身現の造次なり。すでに諸佛體といふ、蘊處界のかくのごとくなるなり。一切の功德、この功德なり。佛功德は、この身現の究盡し嚢括するなり。一切無量無邊の功德の往來は、この身現の一造次なり。

しかあるに、龍樹・提婆師資よりのち、三國の諸方にある前代後代、ままに、佛學する人物、いまだ龍樹・提婆のごとく道取せず。いくばくの經師・論師等か、佛祖の道を蹉過する。

※懐奘書写本の書き改めナシ。

あ―ナシ（瑠）
る―り（正）
以表諸佛體―以テ表ニ諸佛ノ體ヲ（龍）
體―躰（抄）、以下略　この―此（抄）
以表を佛體―以表諸佛體（乾）（正）、以テ表ニ諸佛ノ體ヲ（龍）
せざらん―とせざらむ（抄）
へ―ゑ（瑠）
い―云（抄）

の―底本「を」（懐）（乾）（正）（龍）（瑠）（長）（玉）（徳）ニヨリ訂。
括―下「カ」アリ（正）、栝、右「括カ」アリ（龍）
來―ナシ（乾）
あ―ナシ（瑠）
國―国（乾）

【語注】

四大五蘊…四大は、万物を構成する四つの元素である地（固体）・水（液体）・火（熱量）・風（気体）、五蘊は、色・受・想・行・識の五つの集まりのこと。色は物質・肉体をさし、受・想・行・識は主として精神的・知覚的な働きを分類したもので、四大五蘊で私たちのからだ（身心）のことも言う。ところで真字『正法眼蔵』二八八則に、「趙州、有僧問、未有世界、早有此性。世界壊時、此性不壊。如何是不壊性。師云、四大五蘊。僧云、此猶是壊底、如何是不壊性。師云、四大五蘊（趙州、僧有りて問ふ、未だ世界有らざるに早く此の性有り、世界懐する時此の性懐せずと。如何ならんか是れ不懐の性。師云く、四大五蘊。僧云く、此れは猶お是れ懐する底、如何ならんか是れ不懐の性。師云く、四大五蘊）」（『春秋社本』五・二七〇頁）とある。これは『圜悟拈古』十七則（『大正蔵』四十七・七九〇中）からの引用と思われる。本文にある「四大五蘊と道取し会取する」とは、この趙州の語を踏まえたものであると考えられ、道元禅師は「此性」を「仏性」と捉え、趙州が「不壊性」である「仏性」について「四大五蘊」と示したことをここに挙げたものと思われる。『永平広録』一四〇上堂（『春秋社本』三・八八頁）、『趙州録』（『禅の語録』十一・三五二頁）にも出典が見られる。

造次…日常生活における僅かな間の振る舞いのこと。造次は『論語』里仁篇に「君子無二終レ食之間違レ仁、造次必於レ是、顚沛必於レ是」とあり、僅かな間のこと。『禅語』には「①おいそれと、安直に、「取次」ともいう。②いいかげんな。「等閑」と同義」（二七二頁）とあり、『中村仏教』には「①わずかの間のふるまい、挙動。②いそいで。③かりそめにも。忽卒」（八七九頁）とある。『正法眼蔵』「別本心不可得」には「造次心、是道」（『本山版訂補』一〇八頁）という語が見られ、「造次心」を暫時の心、転変する迷いの心とし、これを離れて仏道はないとする。また『正法眼蔵』「三界唯心」には「造次顚沛」という語が見られ「青・黄・赤・白これ心なり、長短方円これ心なり、（中略）春華秋月これ心なり、造次顚沛これ心なり」（『本山版訂補』五五一～五五二頁）とある。「造次顚沛」については、大谷哲夫編『『正法眼蔵』『永平広録』用語辞典』（大法輪閣、二〇一二年四月）に「とっさの場合、危急存亡のとき、急遽苟且（こうしょ）の義。造次は倉卒、顚沛は傾覆流離の際。わずかの間の意。日用かりそめの起居動作をいう」（二二一頁）とある。中村宗一『正法眼蔵用語辞典』（誠信書房、一九七五年一月、二四七～二四八頁）には、「造次の意は、あわただしい場合で造次顚沛と熟語する。顚はころがる、沛はたおれる意で、造次顚沛は少しの間の意で、不断、常に、何時までもなどの意に用うる語である。禅語では平常心の意に用いられている」とある。『永平広録』五一三上堂の『春秋社本』の脚注には、「造

次顚沛 - わずかの間。」（『春秋社本』四・九四頁）とある。**嚢括**…つつみくくる。嚢中に容れて口をくくる。残らず包み取る意（『禅学』一〇〇六頁）。**一造次**…前掲「造次」の項参照のこと。『正法眼蔵私記』には、「仏量祖量モ身現ノ造次ナリ、造次ハ急遽苟且之時ト註シテ日用ノ左之右之ヲイフ」（『蒐書大成』十九・五七〇頁）とある。**蹉過**…蹉はすぎる、たがう。過は助詞。時機を逸してしまう。すれちがってしまう。錯過（『禅学』四六五頁）。**まま**…そういつもというわけではないが、どうかすると時々出現するさまを表わす語。おりおり。たまたま。往々（『日本国語大辞典 第二版十二巻、小学館、二〇〇一年十一月、五〇三頁）。動作・状態がまれではないさま。往々にして（『角川古語大辞典』五、角川書店、一九九九年三月、四三七頁）。ときどき。おりおり（『旺文社古語辞典』第十版、旺文社、二〇一五年十月、一一九七頁）。ここでは「時として」と訳した。

【直訳】

そうであるから、身現が説仏性であることは、虚明であり、廓然である。説仏性が身現であることは、以表諸仏体である。いずれの一仏二仏が、この以表を仏体としないであろうか。仏体は身現であり、身現である仏性がある。四大五蘊と道取し、会取する仏量祖量も、かえって身現の造次である。すでに諸仏体と言っている、蘊処界はこのようにあるのである。一切の功徳は、この功徳である。仏功徳は、この身現が究尽し、嚢括するのである。一切の無量無辺の功徳の往来は、この身現の一造次である。

そうであるのに、龍樹・提婆師資より後に、三国の諸方にある前代後代、ままに、仏学する人物は、いまだ龍樹・提婆のように言っていない。どれほどの経師論師等が、仏祖の言葉を蹉過したであろう。

【現代語訳】

そうであるから、身現が説仏性である（仏性を説いている）ことは、〈満月輪のように〉はっきりと明らかである。説仏性が身現であることは、仏性を諸仏の体で表したのである。どの一仏でも二仏でも、この表現を仏体としない仏があろうか（ありはしない）。仏体は身現であり、身現である仏性があるのである。〈仏性を〉「四大五蘊」と説き、会得する仏祖の力量も、むしろ身現の中のひとときのふるまいである。すでに諸仏体というのであるから、蘊処界（五蘊・

十二処・十八界）がこのようにあるのである。一切のはたらきは、この〈身現の〉はたらきである。仏のはたらきは、この身現が究め尽し、残らず包みこむのである。一切の限りないはたらきの様々なあり方は、この身現の一つのひとときのふるまいである。

そうであるのに、龍樹と提婆という師匠と弟子の後、三国（インド・中国・日本）の諸方の古今の人々で、時として仏法を学んだ人物はいるが、いまだ龍樹・提婆のように言っていない。どれほど多くの経師・論師たちが、仏祖の言葉を誤って捉えたことであろう。

*大宋國むかしよりこの因縁を畫せんとするに、身に畫し、心に畫し、空に畫し、壁に畫することあたはず、いたづらに筆頭に畫するに、法座上に如鏡なる一輪相を圖して、いま龍樹の身現圓月相とせり。すでに數百歳の霜華も開落して、人眼の金屑をなさんとすれども、あやまるといふ人なし。あはれむべし、萬事の蹉跎たることかくのごときなる。もし身現圓月相は一輪相なりと會取せば、眞箇の畫餅一枚なり。弄他せん、笑也笑殺人なるべし。かなしむべし、大宋一國の在家・出家、いづれの一箇も龍樹のことばをきかず、しらず、提婆の道を通ぜず、みざること。いはんや身現に親切ならんや。圓月にくらし、満月を虧闕せり。これ稽古のおろそかなるなり、慕古いたらざるなり。古佛・新佛、さらに眞箇の身現にあふて畫餅を賞翫することなかれ。

※懐奘書写本の書き改めナシ。

大―上「又」アリ（抄）　むかし―昔（抄）
この―此（抄）　畫―右「クワ」アリ（抄）、以下略
ん―む（抄）　心に畫し―ナシ（抄）
畫―右「クワ」アリ（龍）、以下略
壁―右「カヘ」アリ（抄）　こと―事（抄）
座―右下「ノ」アリ（龍）
如―左下「レ」アリ（正）（龍）
鏡―右「キャウ」アリ（抄）、右下「ノ」アリ（龍）
る―リ（乾）　圖―右「ツ」アリ（抄）
いま―今（抄）　の―下「身現ノ」アリ（乾）
身現円月相―身現二円月ノ相ヲ（龍）　ふ―う（瑠）
蹉―右「シャ」アリ（龍）
跎―右「タ」アリ（龍）、左下「陀」アリ（龍）
し―の（正）
相―ナシ（乾）　箇―个（乾）以下略　の―ナシ（乾）
他―底本「佗」、（懐）（正）（龍）（瑠）（長）（玉）（徳）
ニヨリ訂。
ばを―をは（乾）

お―を（正）（龍）（瑠）（長）（玉）
なり―也（正）
新―親（瑠）
ふ―う（乾）

【語注】

身に画し～あたはず…身で以て画き現し、心で以て画き現し、空で以て画き現し、壁で以て画き現すことができない。ここは、ただ筆先で一円相を書いて龍樹の円月相としていることを批判する。『正法眼蔵聞解』には「空ヤ壁ニ画スルコトアタハザルハ、山河大地ミナ身現ト云フコトヲ不レ知故也。故ニ筆デ書ッモノト覚ヘテ、如レ鏡ナル餅屋ノカンバンノ羊ニ画スルノミ」（『蒐書大成』十七・一八頁）とあるが、山河大地、全世界が身現であり、仏性の現れであることを言う。ここで「身に画し」の身とは〝正身端坐〟の身であり、「心に画し」の心とは〝三界唯心〟の心であり、「空に画し」の空とは〝色即是空〟の空であり、「壁に画し」の壁とは〝牆壁瓦礫〟の壁であり、いずれも全世界、あるいは全世界のあらゆる存在をいう。**霜華**…秋の霜と春の花のことで、一年のことをいう（『中村仏教』八七八頁）。『正法眼蔵聞解』には「霜花ハ、春秋ノ事ニナル。開字ハ、春花ニ掛ケ、落字ハ、秋霜ニ木葉ノ揺落スルヲ云也」（『蒐書大成』十七・一八頁）とある。**人眼の金屑**…目の中に入った金の粉。「金屑」は、「さとりのことをたとえていう。すぐれた境界」（『中村仏教』二四九頁）、「仏や法に対する囚われを警めた言葉。金屑は貴いものであっても、眼の中に入ると翳となる」（『禅学』二三七頁、「金屑眼中翳」項）こと。また、真字『正法眼蔵』二〇七則の王敬初と臨済の問答の中に「金屑雖貴、落眼成翳（金屑は貴しと雖も、眼に落つれば翳を成す）」（『春秋社本』五・二三四～二三五頁）の語が見られる。『正法眼蔵抄』では、「金屑トハ、金ノスリクツナリ。金ハユヽシキ重宝ナレトモ、スリクツヲ目ニ入ヌレハ難堪、其喩ナリ」（『蒐書大成』十一・一四五頁）と解釈している。ここでは、龍樹が坐禅して身に円月相を現じた故事（金屑）を、数百年後の大宋国の人間が正しく理解できていないことをいう。**蹉跎**…踏み違え。誤認。また、「①つまずく。②時機を失う。③ふしあわせで志を得ないこと」（『中村仏教』四四〇頁）、「①足を踏みはずし転ぶ。②時機を失する。③衰退する。④失意のさま。⑤ふぞろいなさま」（『漢辞海』一三九九頁）、「①つまずく。顚躓。②時機を失ふ。③ふしあはせで志を得ない。失敗する。生活が思ふやうにならない」（『大漢和』十・一一三八六頁）こと。『正法眼蔵渉典和語鈔』には「字書ニ、蹉跎ハ失時也トモ、亦不レ遂二其意一トモ注ス。諺ニ、アシフミスヘシ、ト云コヽロ」（『蒐書大成』二十一・四九二頁）とある。**画餅**…画に描いた円い餅。また、「空しい気休め。実行を伴わない所為」（『禅語』五二頁、「画餅充飢」項）、「絵にかいたもちは実際に飢えを満たすことはない」（同前同頁、「画餅不充飢」項）、「もちの絵をえがく。又、画にかいた餅。食ふことができないことから、実用にならない喩。又、無効の喩」（『大漢和』七・一一一七頁）こと。ここでは、身現

円月相を理解せずに、ただの一円相を描くことを、それはただ〝絵に描いた円い餅〟であると揶揄している。**弄他**…他人を翻弄すること。『正法眼蔵私記』には「弄他トハ他ヲ弄シ、ナブリモノ、アソビモノ、一物ノ弄翫具トナルヲイフ」（『蒐書大成』十九・五七一頁）とあり、『正法眼蔵那一宝』には「弄他（ナブル意）」（『蒐書大成』十六・二九頁）とある。**笑殺人**…笑止千万。嘲笑の語感。「笑いとばす」（『禅語』二一七頁、「笑殺」項）、「世間の笑いものになる」（同前同頁、「笑殺天下人」項）、「①大いに笑う。㊟「殺」は、程度のはなはだしさを示す補語。②笑って無視する」（『漢辞海』一〇六九頁）こと。**親切**…親密なさま。「ぴったり適合する。非常に適切なこと」（『禅学』六一七頁）。「①ぴったりしているさま。②身近である。③確実なさま。④思いやりのある態度で接するさま」（『漢辞海』一三一三頁）。**虧闕**…欠ける。欠落。「欠ける。完全でなくなる」（『漢辞海』一二六七頁、「虧欠」項）。**稽古**…先人たちに学ぶ姿勢。「いにしえの道をかんがえる意。またいにしえを慕う意。転じて学問・学習すること。練習することをいう」（『禅学』二五八頁）。**慕古**…いにしえを慕うこと。ここでは、先人たちを敬う心。古仏・**新仏**…「古仏」とは、古の仏、あるいは有徳の僧を尊敬して言う。「新仏」とはこれから新たに仏となる者を言うか。ここでは、古の仏たる者も、これから仏になる者も、仏たる者は真の身現を正しく理解しなければならないことをいう。**賞翫**…褒めもてあそぶ。「ほめもてあそぶ。賞玩に同じ」（『大漢和』十・七七四頁）とある。

【直訳】

大宋国では昔からこの因縁を描こうとして、身に画き、心に画き、空に画き、壁に画くこともできず、いたずらに筆先で描いて、法座上に鏡のような一輪相を画いて、現在でも〈それを〉「龍樹の身現円月相」としている。すでに数百年の歳月を経て、人眼の金屑となろうとしているが、誤っていると言う人はいない。あわれむべきである、全てを踏み違えてしまっていることはこのようである。もし身現円月相が一輪相であると受けとれば、本当の絵に描いた餅一枚である。他人を翻弄しようなど、全く笑止千万である。悲しむべきである、大宋一国の在家者も出家者も、誰一人として龍樹の言葉を聞かず、知らず、提婆の言葉に通じず、見ていないことを。ましてや身現に親切であろうか。円月に暗く、満月を虧闕している。これは稽古がおろそかであり、慕古がいたらないからである。古仏も新仏も、本当の身現に会って、決して画餅を賞翫してはいけない。

【現代語訳】

大宋国では昔からこの因縁（龍樹が身に円月相を現した故事）を画き現そうとするのに、身で以て画き現し、心で以て画き現し、空で以て画き現し、壁で以て画き現すことができず、むやみに筆先で描いて、法座の上に鏡のように一つの〈円い〉輪を画いて、現在でも〈それを〉「龍樹の身現円月相」としている。すでに数百年の歳月を経過して、その間、あたかも尊い金の屑でも人の眼に入れば眼を害するように、龍樹が身に円月相を現した故事が誤って理解されてしまっているが、誤っていると言う人は大宋国にいない。嘆かわしいことである、このことに限らず万事がこのように誤ってしまっている。もし身現円月相が一つの〈円い〉輪のような相であると受けとれば、それこそ絵に描いた円い餅にすぎない。人々を愚弄していることは、全く笑止千万である。悲しむべきである。大いなる宋の国の在家者も出家者も、誰一人として龍樹の言葉を〈正しく〉聞かず、〈正しく〉知らず、提婆の言葉に通じず、理解していないことを。ましてや、龍樹の身現を親密に理解していようか。円月（仏性の相）をよくわかっておらず、満月（仏性の相）も欠けてしまっている。これは十分に学んでいないからであり、先人たちを敬う心が足りないからである。古の仏も、新たに仏となる者も、〈仏たる者は〉真の身現に出会い、〈これを正しく体得して〉決して絵に描いた餅を褒め弄ぶようなことがあってはならない。

しるべし、身現圓月相の相を畫せんには、法座上に身現相あるべし。揚眉瞬目、それ端直なるべし。皮肉骨髓正法眼藏、かならず兀坐すべきなり。破顔微笑つたはるべし、作佛作祖するがゆゑに。この畫いまだ月相ならざるには、形如なし、說法せず、聲色なし、用辨なきなり。もし身現をもとめば、圓月相を圖すべし。圓月相を圖せば、圓月相を圖すべし、身現圓月相なるがゆゑに。圓月相を畫せんとき、滿月相を圖すべし、滿月相を現ずべし。しかあるを、身現を畫せず、圓月を畫せず、滿月相を畫せず、諸佛體を圖せず、以表を體せず、說法を圖せず、いたづらに畫餅一枚を圖す、用作什麼。これを急著眼看せん、たれか直至如今飽不飢ならん。月は圓形なり、圓は身現なり。圓を學するに、一枚錢のごとく學することなかれ、一枚餅に相似することなかれ。身相圓月身なり、形如滿月形なり。一枚錢・一枚餅は、圓に學習すべし。

※懷奘書写本の書き改めナシ。

圓—円（乾）、以下略　畫—右「クワ」アリ（龍）
ん—む（抄）、以下略
端直—右「タンチキ」アリ（抄）
かならず—必（抄）　坐—座（乾）（正）（龍）（瑠）
ゑ—へ（抄）（懷）（乾）（正）（龍）（長）（玉）（德）、以下略。
畫—右「クワ」アリ（抄）　いまだ—未（抄）
形—右「キヤウ」アリ（抄）　聲—声（乾）（長）（玉）
辨—辯（懷、辦（長）
ば—ず（瑠）
圓月相を圖せば、圓月相を圖すべし—ナシ（玉）
圖せば—「圖」ノ右「ヅ」アリ（龍）
圖すべし—圓すべし（長）
圓—円（龍）、以下略
を—ナシ（長）
あ—ナシ（瑠）　圖—右「ツ」アリ（龍）
體—右「タイ」アリ（抄）
を—ナシ（玉）　畫—右「クワ」アリ（抄）
枚—右「マイ」アリ（抄）　す—を（瑠）
用作什麼—用ヲ作レ什麼（龍）　什麼—麼什（正）
急著眼—急ニ著レ眼ヲ（龍）　著—着（正）
直至—右、「チシ」アリ（抄）
直至如今—直ニ至レ如ニ今ニ（龍）
飽—右「ハウ」アリ（抄）
飢—右「キ」アリ（抄）
學—学（乾）（正）、以下略
圓月身—月身圓（正）

【語註】

法座…法を説く場処。演法の座の意で、法堂における須弥座のこと。法坐。また、首座の法戦道場のこと。「於二法堂門内拝席一、近二南面法座一而立」（『禅苑清規二、上堂』（『禅学』一一二九頁）。ここでは、「法を説く場所」の意。**揚眉瞬目**…揚眉は、眉をあげること。瞬目は、目ばたきをすること。日常普段のあたりまえな動作のたとえ。また、世尊拈華微笑の公案から出た言葉。また、師家の接化のあり方をいう。ここでは、広く宗師家が学人を指導するはたらきのことで龍樹が兀坐することによって仏性を示したことをいう。**端直**…正しく真っすぐなさま（『漢辞海』一〇五〇頁）。まっすぐなこと（『中村仏教』九四〇頁）。ここでは、龍樹が端的に仏性を坐禅の姿で示したこと。**皮肉骨髄**…前出。「仏性訳註（一）」八一頁「汝得吾皮肉骨髄」参照。仏祖の皮肉骨髄正法眼蔵を正伝した者は、必ず坐禅をすべきことをいう。「皮肉骨髄」の語は、『正法眼蔵』「袈裟功徳」に「三世諸仏の皮肉骨髄を正伝せるなり、正法眼蔵を正伝せるなり」（六四二頁）とあり、袈裟を身につけることが三世諸仏の「皮肉骨髄」を正伝することであり、「正法眼蔵」を正伝することであるとする。**兀坐**…坐禅の姿で、山のごとく不動なさまをいう。『正法眼蔵』「道得」に、「兀坐不動は仏眼也覷不見なり、仏力也牽不及なり」（三〇三頁）とあり、端坐の無言の行は、仏の眼でも見通す事はできず、仏の力でも動かすことはできないと言い、正しく端坐して言説しないことを説く。**破顔微笑**…顔をほころばせほほえむこと。釈尊が優曇華を拈じてまばたきされたとき摩訶迦葉がにっこりと微笑み、それを見た釈尊が摩訶迦葉に「正法眼蔵涅槃妙心」を付属した故事。ここでは、その「正法眼蔵涅槃妙心」が今日に伝わっていることをいう。**用作什麼**…「用って什麼にか作ん」。什麼は、「何の、どんな」の意。ここでは、「そのようなことをして何になるのか」の意。**急著眼看**…急は、「厳しく、堅く、確り」の意。著眼看は、「眼をつけてみる」の意。用例としては、『正法眼蔵』「都機」に「たれか舟岸を再三撈摝せざらん、たれか雲月を急著眼看せざらん」（二〇九頁）とあり、これに対して『正法眼蔵抄』では「急著眼看」（『蒐書大成』十二・二九五頁）と注釈している。ここでは、「確りと眼をつけてみる」の意。**直至如今飽不飢**…「直に如今に至って飽いて飢えず」。『正法眼蔵』「都機」の『正法眼蔵抄』では、「飽不飢」（『蒐書大成』十二・二九四頁）と注釈している。「飽不飢」は「充分で、何の不自由もない」の意。この語は、『景徳伝燈録』巻十二、灌谿志閑章に「住後謂衆曰、我見臨済無言語。直至如今飽不飢（住して後、衆に謂いて曰く。我れ臨済に見えしに言語なし。直に如今に至るまで飽きて飢えずと）」（『禅文化本』二二七頁）と見られる。また、『正法眼蔵』「礼拝得髄」には、「直至如今飽飽々」

（出典は『天聖広燈録』巻十三、『禅学叢書』五、中文出版、一九七五年六月、四五八頁）の語が見られ、志閑が臨済のもとで半分を頂き、末山のところで半分を頂いて満腹となり、現在まで飢えることがない（二人の師の指導をうけてしっかりと仏法を会得することができた）ことが示されている。ここでは「今に至ってお腹が一杯で飢えることがない（仏性をしっかり体得する）」と現代語訳してみた。

【直訳】

知るべきである、「身現円月相」の相を画くには、法座上に身現相があるべきである。「揚眉瞬目」は、端直でなければならない。皮肉骨髄正法眼蔵は、必ず端坐するべきである。「破顔微笑」は、伝わっているはずである、というのは作仏作祖するのであるから。この画がまだ、月相でないなら、円月相の形ではないし、説法もせず、声色もなく、用弁もないのである。もし身現をもとめるならば、円月相を図にするべきである。円月相を図にするならば、〈身現の〉円月相を図にするべきである、「身現円月相」なのであるから。円月相を画くなら、満月相を図にするべきであり、満月相を現すべきである。そうであるのに、身現を画かず、円月を画かず、満月相を画かず、諸仏体を図にせず、以表を身体とせず、説法を図にせず、意味も無く、絵にかいた餅一枚を図にする、そのようなことをして何になるのか。これにしっかりと眼をつけて見なさい、誰が「今に到って満腹で飢えない」であろう。月は円形であり、円は「身現」である。円を学ぶのに、一枚の銭のように学んではならない。一枚の餅に似たものと思ってはならない。身相が円月身であり、形如が満月形なのである。一枚の銭、一枚の餅は、円に学習すべきである。

【現代語訳】

知るべきである、「身現円月相」というその姿を画くには、法座の上に〈坐禅をしている〉「身現相」（現実の身体そのままの姿）を画くべきである。「揚眉瞬目」（師家の接化のあり方）は端的でなければならない。達磨大師が四人の弟子に、皮・肉・骨・髄として伝えた正法眼蔵（正しい仏法）においては、必ず不動の坐禅をすべきである。〈釈尊から摩訶迦葉へ〉「破顔微笑」により付嘱された仏法が伝わってきたのは、歴代の仏祖が坐禅によって仏となり祖となったから伝わってきたのである。この〈身現円月相の〉画がいまだに月のように円い画でなかったなら、そもそもはっきり

と形として現れることもなく、説法することもなく、声も姿もなく、巧みなはたらきもないのである。もし〈龍樹の〉「身現」を求めるならば「円月相」を図にするべきである。円月相を図にするのならば、〈龍樹の身現（坐禅した姿）を〉「円月相」の図にするべきである、それが龍樹の「身現円月相」なのであるから。〈そして龍樹の〉「円月相」を描こうとするときには、「満月相」を図にするべきであり、〈龍樹が坐禅した姿であるところの〉「満月相」を〈図にして〉現わすべきである。そうであるのに、〈龍樹が坐禅をしている〉「身現」を画かず、〈龍樹が坐禅している姿である〉「円月」を画かず、〈龍樹が坐禅している姿である〉「満月相」を画かず、諸仏の身体を図にせず、仏の身体として表わすことをせず、〈坐禅の姿としての〉「説法」を図にせず、意味もなく一個の餅のような円を〈画いて〉図として、そのようなことをして何になるのか。これにしっかりと眼をつけてみなさい、〈そうしなければ〉誰が「今に至ってお腹が一杯で飢えることがない（仏性をしっかり体得する）」ことができよう（誰もできない）。月は円形であり、その円形が「身現」である。その円を学ぶのに、一枚の円い銭のようなものとして学んではならない。一個の円い餅に似たものと思ってはならない。身相（龍樹が坐禅している姿）そのものが円月身（円月のように完全無欠な身体）であり、形如（龍樹が坐禅している姿形そのもの）が満月形（満月の形）なのである。一枚の銭、一個の餅として描いたとしても、それを「円」（龍樹が坐禅した姿）として学ぶべきである。

※本稿では【解説】は記載せず、次稿に龍樹段全体のものを記載する。

〈キーワード〉道元、懐奘、『正法眼蔵』、「仏性」巻、訳註、校異